

繁殖戦略としての戦争の進化的研究

尾上 正人*

Evolutionary Research for Wars as a Reproductive Strategy

Masato ONOUE

要 旨

トマ・ピケティの『21世紀の資本』には、2度の世界大戦のみが、資本主義における格差拡大傾向を押しとどめたという、いささか物騒な記述が散見される。本研究はこれにも示唆を得て、進化生物学の「ハミルトン・ルール」(包括適応説)に準拠しつつ、戦争を単なる国民大衆に降りかかる災難ではなく、既存の階層秩序が揺らぐ中で戦功を上げて一族の栄達を図る、繁殖戦略に裏打ちされた身内びいき的利他行動の場である、という仮説を立てた。この仮説を検証するため、究極的利他行動である特攻の実行者の遺族、および生存者を対象とした聞き取り調査を行なった。両家族の比較の結果、当初想定していたような「ハミルトン・ルール」は妥当せず、特攻戦死者の遺族が重要な働き手を失って家族の再生にかなり苦勞し、未成年のきょうだいたちも十分な教育が受けられなかったのに対して、生存者の家族は戦後の生活の立て直しも比較的容易であったことがわかった。

【キーワード】 戦争、進化生物学、繁殖成功、包括適応、特攻

I. はじめに——仮説とその背景

2013年に公刊、翌年に邦訳も出たトマ・ピケティの世界的話題書、『21世紀の資本』には、20世紀において2度の世界大戦が「富の集中」を防いで「格差縮小」をもたらす効果があったという、いささか物騒な立証記述が何度も出てくる——「20世紀に格差を大幅に縮小させたのは、戦争の混沌とそれに伴う経済的、政治的ショックだった。…20世紀に過去を帳消しにし、白紙状態からの社会再始動を可能にしたのは、調和のとれた民主的合理性や経済的合理性ではなく、戦争だった」(Piketty 2013=2014:285)。そして極めつけは——「ひとつの大きな教訓はすでに明らかだ。過去を一掃して格差の構造を一変させたのは、相当部分が20世紀の両大戦だったということだ。…ひたすら次の危機や次の大戦(今度は本当の世界大戦になる)を待つしかないのだろうか?」(Piketty 2013=2014:489)。

このような、ピケティ理論の「ダークサイド(暗黒面)」とも言うべき世界大戦格差縮小効果説は、終戦直後の日本における、太宰治の『斜陽』に象徴されたような上流階級の没落や、本田
平成29年9月13日受理 *社会学部総合社会学科 教授

宗一郎のごとき徒手空拳の起業家の族生を想う時、首肯し得る点があるかもしれない。さらに、戦争が格差縮小効果を持つことの認識が、幅広く当時の国民諸階層、特に中流階級以下の階層に持たれていたとしたら、どうであろうか。戦争を、またそれに連なる志願や軍内での昇進を、自ら、およびその家族（家）の栄達・繁殖成功の手段として捉えていた人々が大勢いたのではないか、ということである。

本研究のこうした問題意識の背後にあるのは、「包括適応 (inclusive fitness)」ないし「血縁淘汰 (kin selection)」と呼ばれる、生物の利他行動を説明する進化生物学のメジャーな学説である。考案者の名前を取って「ハミルトン・ルール」とも呼ばれるその説は、下記の不等式が成り立つ場合に血縁者に対する身内びいき的な利他行動が進化するとする。

$k > 1/r$ k : 利他行動の受益者の利得とコストの比 r : 血縁度係数

このルールは、それまで謎であった半倍数体の真社会性昆虫の不妊ワーカー（大半の働きアリ・ハチ）の自己犠牲的な行動を、過てる「種の保存」の前提に立つことなく説明し得たことで、進化生物学理論のスターダムにのし上がったのである (Hamilton 1964)。

さて、この包括適応説ないしハミルトン・ルールを、どこまで人間社会に適用できるのであろうか。つまり、一見すると純粋な利他行動に見えるものを、どこまで血縁原理で説明できるであろうか。特に戦争という、自らの命が高い確率で失われるケースにおいて、その戦闘行動への参加が、何らかの意味で血縁者の繁殖成功率¹⁾（直接的に子孫の数を増やす以外にも、きょうだいや家に威信・名誉をもたらす等）を上げているということが言えるであろうか。仮に言えるとして、その繁殖成功の度合いは血縁度の係数と照らし合わせた際、上記のハミルトンの不等式を満たすものなのであろうか。

戦争を参加当事者たちの、包括的な——つまり、自身と直系の子孫の適応度を上げるにとどまらない——適応度を上げる繁殖戦略として捉えることは可能であろうか。本研究では、このような問題設定をした上で、特別攻撃隊（特攻、いわゆるカミカゼ）・特攻兵とその家族という、戦争当事者の中でも極限的なケースを、研究対象として選んだ。

II. 特攻——研究対象と方法

戦争における自己犠牲的な利他行動の極限としての自爆攻撃 (suicide attack) は、決して日本の特攻だけのものではなく、先例はいくつもあるとされる。古代ギリシアの、テルモピュライの戦いで300人のスパルタ兵の行動がそうであると言われるし (Orbell and Morikawa 2011: 317-8)、ほかならぬ太平洋戦争においても、珊瑚礁海戦やミッドウェー海戦で米軍側にも体当たり攻撃は見られた (Millot 1970=1972: 34-5)。そして今日、イスラム過激派の一部が行なっている自爆テロが海外においては「カミカゼ」の名で語られていることは、よく知られている²⁾。

その意味で、特攻は決して戦争における唯一無二の自爆攻撃例というわけではないのだが、しかし本研究の立てた仮説の検証にとって、有効な事例ではあるだろう。なぜなら、まず第1に何よりも上記のように、自爆攻撃の結末が、遂行されれば自らの（少なくとも今後将来の）繁殖可能性を絶つという意味で、通常の自爆を伴わない戦争中の行為と比べて、戦争の包括適応的でない

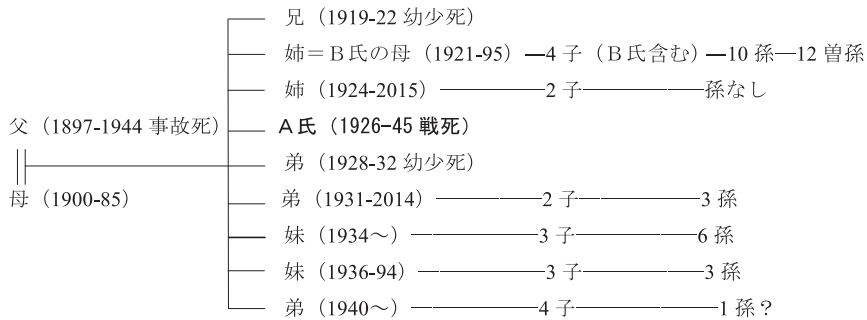


図1 特攻戦死者A氏の家族構成

し血縁淘汰的方向の利得／損失を測定しやすい事例になっているということである。

第2には、何らかの形で（出撃せず、不時着など）、自爆攻撃が未遂に終わった人たち（以下、「生存者」と表記する）が今日なお少数ながら存命中であり、彼ら生存者とその家族と、遂行者（つまり戦死者）の家族（以下、「遺族」と表記する）との戦後の暮らし向きや階層移動状況を比較することが可能であるからである。すなわち、もしも本研究における包括適応説に基づく仮説が真ならば、入隊までに社会階層上ほぼ同じポジションにいた特攻の戦死者と生存者では、戦死者の遺族の方が生存者のきょうだいや戦後の構成家族（子孫）よりも、戦後は何らかの形で——直接に収入・暮らし向きの面で、あるいは学歴・職業・威信等において——上回った、つまり進化生物学というところの繁殖成功度が高くなったと予想されるはずである。

本研究ではこのような理由から、特攻戦死者の遺族、および生存者を、調査対象として設定することにした。

対象設定のために、まず2016年8月中旬に、鹿児島県にあった3つの特攻出撃基地（旧陸軍の知覧・万世、旧海軍の鹿屋）の跡地に建てられた史料館・平和館を訪問し、生存者や遺族に対する聞き取り調査のアポイントメントの可能性を探った。最も有名な知覧特攻平和会館（南九州市）では、一大観光地化しているほどの賑わいぶりであったが、依頼したところ、遺族・生存者へのアポイントメントは難しいとのことであった。また、自衛隊の鹿屋航空基地内にある史料館も訪ねたが、慰霊祭や遺族・生存者の名簿管理等は鹿屋市役所で行っており、ここもすぐにアポイントメントは難しそうであった。それらに対して、南さつま市の吹上浜近くにある万世特攻平和祈念館では³⁾、こじんまりした建物ではあるが、館員の方に親切に対応していただき、生存者・遺族（特攻による戦死者総計201名）へのアポイントメントも可能であるとの回答が得られた。

そこで9月下旬、万世特攻平和祈念館の館員のご紹介で、東京都および埼玉県にて遺族と生存者、1名ずつから聞き取り調査をすることができた。

Ⅲ. 聞き取り調査の結果

1. A 氏の遺族 B 氏からの聞き取り

東京都北区赤羽にて、1945年4月に万世飛行場より第102振武隊の隊員として特攻出撃し、沖縄近海で戦死したA氏の甥にあたる、B氏から聞き取り調査を行なった（B氏は戦後生まれなので、叔父であるA氏を直接には知らない）。

1) A 氏の戦死まで

A氏は1926年、高知県高岡郡（現在の土佐市高岡）で、林業を営む父母のもとに生まれた。A氏の家は400年以上遡る土佐藩士の末裔で、土佐藩の時代に一度2つに分けられた家を婚姻によりもう一度1つにして再興しようという意図が戦前・戦中にはあり、その結果、A氏の姉（B氏の母）がかつて分かれた他方の家に嫁ぐことになった（後述）。図1の家族構成に示されるように、A氏は9人まで生まれたきょうだいの一番上の男子となり（上にいた兄は乳幼児期に死亡）、実質的な跡取り息子であった。A氏は高等小学校・国民学校を卒業後、陸軍航空学校に入り、陸軍少年飛行兵学校・陸軍飛行学校を卒業し、満州の部隊などを経た後、第102振武隊に配属され特別攻撃隊員となった。

A氏の父は、A氏が軍に入隊した頃の44年9月に、林業の最中の事故（大量の木材を運ぶ「木馬（きんま）」に轢かれる）で死亡した。A氏が特攻隊に入った段階では、上の2人の姉は嫁いでいたが、幼少で死んだ子を除いて下の4人の子（弟・妹2人ずつ、終戦時に上から14歳、11歳、8歳、5歳）が家に残っており、A氏の母はこれらの子たちを抱えた母子家庭として、戦後再出発することになる。

A氏は出撃前に、下記のような「遺書」を一人親である母に向けて残している。享年18歳、戦死後は特攻であったため2階級特進して少尉となった。

遺書

A（押印）

一、母上様 Aは二十才の今日迄厚い厚い御愛を受け誠に幸福で御座居ましたにも拘はらず何一つ御安心を願はずして来るは本当に心苦しく思つて居りますが今決戦場に馳参じ立派な御奉公致す時は君に忠となり母上様には孝の万分の一となり御安心願はると信じて居ります。

二、A戦死するに当り誠に御迷惑とは思ひますが従兄忠孝の墓に並び粗末なので良いですから建て、下さい 何時も、も我儘申して申訳ありません

最後に母上様の御健勝を御祈り致すと共に御親籍様によろしく御伝へ下さい

2) 戦後のA 氏の遺族

働き手の成人した息子A氏を失った母は4人の未成年の子を抱え、女手一つで田畑を耕して現金収入を得て暮らした。林業をしていた山にイモを栽培し、イモそのものだけでなくその「つる」を煮て子どもたちに食べさせるなど、厳しい生活であった。

A 氏の 5 歳下の弟は、後継ぎがいなかった母のすぐ近くの実家を継ぐことにはなったが、しばらくは母やきょうだいとともに暮らした。

A 氏の 8 歳下の妹は、高岡の病院一家に嫁いだ。しかし、夫は三男であったのでそれほど裕福ではなく、結婚して数年たってから夫婦でブラジルに移民した。当時のブラジルは復興期の日本よりも豊かで、小学生の B 氏やその母（つまり、この人や A 氏の姉）も一時呼び寄せられて、B 氏が中学 3 年生の時まで 6 年間生活して帰国した。

A 氏の 10 歳下の妹は、中学卒業後、高岡の実家から高知市内に通勤しつつ、「苦学し亡くなった兄 [A 氏] を見習ってがんばろう」と、英語を独学し通訳ができるくらいに習熟した。やがて求婚された日系米国人と結婚し、米国に嫁いだ（少年時代の B 氏も岸壁に見送りに行った記憶があるという）。3 人の子に恵まれ、長男はニューヨークで医師をし、次男と長女はカリフォルニア州に住んでいる。

一番下の A 氏の 14 歳下の弟は、働きながら夜間の定時制高校に通った。その後、親戚を頼って大阪に行き、新大阪駅前に会社を持てるまでになった。やがて老後の母を引き取り、母はそこで天寿を全うした。

甥の B 氏が概括するには、「いろいろありましたので、ピンからキリまで分かれてしまいましたね。家を繁栄させるために両家を結婚によって統合させる目論み [前述] は外れてしまいました。実家はあつてないような状態になったのではないか。[A 氏の] きょうだいはみな、十分な教育を受けられなかったのです。[父が山で事故死したので] 本来は A 氏が父親代わりで力仕事をやるはずでした。母から見れば、『惣領』たるべき A 氏が出ていったということは、お国のためとは言え、大変なことであつたでしょう」。

戦争・特攻が及ぼした影響を B 氏に尋ねると、「地域のみなが、A が特攻で戦死したことは知っていたようです。しかし、特攻でない戦死者は地域内にいくらかいたので、特攻が名誉な戦死ではあつても、それによって評価されたり援助を受けたりといった特別な出来事は全くなかったと思いますね。『義務を果たして、お国のために死んだ』と人は持ち上げてはくれますが、それは言葉だけのものです。戦後になると、軍人恩給をもらえていいなという妬みみたいなものもあつたようですが、しかし恩給があつたから子どもたちに十分な教育を与えることができたかという、全くそうではなかつたのです」。

A 氏の戦死以前からすでに結婚して嫁いでいた 2 人の姉（上の姉が B 氏の母）は、A 氏の戦死の影響を戦後の生活において直接受けることはなかつた。図 1 にあるように、上の姉は多くの孫・曾孫に恵まれ、下の姉は 2 人の男子を早くに亡くして孫が生まれなかつたと明暗は分かれているが、父と A 氏に相次いで先立たれてしまった A 氏の下 4 人のきょうだいに比べると、むしろ安定的であつた印象を私は受けた。

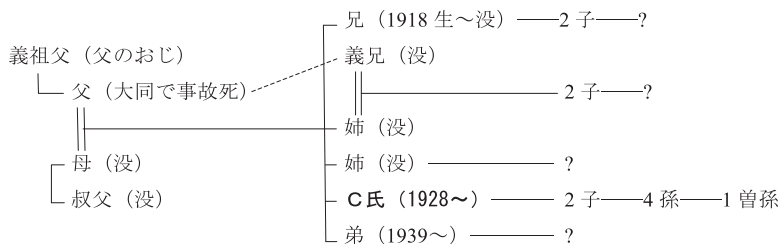
2. 生存者 C 氏からの聞き取り

万世飛行場の特攻隊に所属して出撃することなく終戦を迎えた、飛行第 66 戦隊の生存者 C 氏に、埼玉県志木市のご自宅に伺って約 5 時間にわたって聞き取り調査をした。

1) 終戦までの C 氏の経歴

C 氏は 1928 年、山口県萩市に生まれた。C 氏の（義理の）祖父は海軍の退役軍人で、浦賀で材木商となり、同じく萩生まれの C 氏の父（甥にあたる）を養子に迎え、材木屋の後継ぎにさせた。C 氏の父はその材木屋の暖簾を抱いて萩に戻ってきたのである。C 氏のきょうだいは C 氏を入れて全部で 9 人だが、無事に育ったのは 5 人で、一番上の兄は 10 歳上、姉が 2 人、（中国大陸に渡ってから生まれた）11 歳下の弟が 1 人（図 2 を参照）。父と兄（萩の中学校を卒業後）は満州事変の直後に萩から満州に行き、満鉄の鉄道敷設工事に従事するようになった。35 年、C 氏が小学校 2 年生の時に父・兄のいる満州（北満のチャムス）に家族全員で移住した。37 年に盧溝橋事件で日中戦争が始まると、関東軍占領地の工事需要が増えたため、また家族で天津に移った。この時に、上の姉が父の下で働いていた男性と結婚している（C 氏の義兄となる）。天津にいたのはわずか 1 年で、次は大同に引っ越して、父はそこから内モンゴル・フフホトまで開通していた線路の駅舎設営工事に従事した。父は工事中の事故で亡くなり、代わって義兄（上の姉の夫）が工事を完了させて、一家は今度は北京に移り住んだ（父の死後、一番下の弟が生まれている）。何度も転校をした C 氏はこの時小学 6 年生で、北京日本中学校を受験し合格した。しかし中学 2 年生の冬に太平洋戦争が勃発、父が亡くなった後、義兄にこれ以上経済的負担はかけられないと、女学校に通っていた下の姉とともに退学、C 氏は実兄——すでに 39 年に招集され中国戦線にいたが、マレー上陸など南方作戦にも参加していた——の知人の紹介で国策会社の北支那開発会社に就職し、電報の託送や文書配達の仕事に従事した。北京でも陸軍少年飛行兵の募集が目につくようになっており、もともと憧れのあった C 氏は 43 年に上司の許可を得て受験、久々に内地（大津少年飛行兵学校）の土を踏むことになった。C 氏の述懐によれば、「[満州で住んだ] チャムスはまだ『匪賊』『馬賊』が町なかでバンバンやっている治安の悪い状態で、遊びに行くところは安全な独立守備隊や軍の兵営の中ばかりでした。天津でも日本租界ですら危ないと言われて兵営の塀の中でよく遊んでいて、軍隊を身近に感じていました。兵隊になるんなら飛行兵だと思っていた。9 月 20 日に第 1 次合格通知が来た時は、本当に嬉しかったです」。

2 次試験のため、釜山から船で内地に入り、鉄道で天津に向かう過程では、大陸に比べての内地の配給制度など食料事情の悪化に驚かされた。C 氏は上記の国策会社で電信業務に習熟していたため通信整備を第 1 希望で出したが、操縦（飛行兵）で合格し、望むところであった。そのまま 43 年 10 月に、福岡県の太刀洗陸軍飛行学校の促成科（乙）に入った。ガダルカナル島など戦



※幼少死した C 氏のきょうだい 4 人は掲載していない

図 2 特攻生存者 C 氏の家族構成

局が厳しくなっているのは知っていたが、それらは南方戦線での話であり、ずっと北京に住んでいたので切迫感はなかった。太刀洗での半年間は、初めの3ヶ月は休暇なしで体育、拳銃・小銃の使い方などを学び、後半の3ヶ月はグライダーでの実地訓練のほか、飛行機の構造などの講義があった。その基礎教育が終わると京城（現ソウル）の教育隊に移り、中間練習機である通称「赤トンボ」で宙返り・横転・反転・編隊などの基礎飛行を習った。普通は飛行時間40時間以上必要なところを36時間の速習、半年のところを4ヶ月間で課程を終え、次は平壤の教育飛行隊（朝鮮101部隊）に移り、44年8月から通常半年のところこれも4ヶ月間の速習で、教員も乗れる複座式の九九式襲撃機での急降下・超低空飛行等の練習をした。「赤トンボとは馬力が違うんで2~3日は戸惑ったけど、操縦に慣れちゃうと、こんな愉快なことはないです。自分の思い通り、手足のように動くようになるからね。それくらいにならないと、戦闘はできないです」。ここを終えることで、旧陸軍の飛行機の免許証である「操縦記章」を授けられた。

この頃にはフィリピンのレイテ沖海戦（44年10月）も終わり、C氏は「次は俺たちの番だ」と特攻を覚悟するようになっていたという。というのも1つには、C氏が平壤で習った急降下に適した九九式襲撃機はフィリピンからの特攻機の半分を占めていたからである。その後、現・北朝鮮の海州市にあった錬成飛行隊に入り、実弾での実践、空中射撃、艦船攻撃（跳飛爆撃）等の訓練を受けた。それも45年2月に終わり、中隊長室に一人ずつ呼ばれて、特攻に志願するかどうか聞かれた。「私も『行きます』と言ったと思います。ああいう状況下ですから、断るやつはいなかったのではないのでしょうか」。2月末、すぐにC氏を含む12名の特攻隊（号28飛行隊）が編成されたが、不思議な巡り合わせでこの隊の人々は全員生還することになる。パイロットを指導する助教が不足してきたため、C氏を含む3名が助教に任ぜられた。平壤で特攻隊の編成式を行なった後、3月初めに連絡船と鉄道で岐阜県の各務原の基地まで赴き、特攻用の機体が届くまで待機した。3月下旬の1週間、休暇を取って岐阜市内の旅館に宿泊し、28日には号28飛行隊を送り出す宴会が催された。4月中旬、12機揃った特攻用の飛行機を平壤に持ち帰った。その途上、空の上から眺めた京都の街は綺麗だったが、名古屋・大阪・福岡は空襲を受けていたためボロボロに見えたそうである——神戸港では曳航された丸焼けの空母信濃が見えた。戻ってきた平壤では、助教要員として生徒がいつ来ても教えられるようにと毎日、夜間の空中集合や離着陸訓練等に励んだ。

45年5月下旬、C氏含む助教など10人に飛行第66戦隊への転属命令が出て、いよいよ特攻のため万世飛行場に向かうことになった。どこの隊に入るのかというのは、みんなの大きな関心だったが、これは本当の戦闘部隊であり、当時は戦力の消耗が激しくパイロットも飛行機もない状態だったので、特攻命令が「いよいよ来たか」というよりは、通常の戦隊も特攻隊も同じという意識だった。船で釜山から山口県の仙崎港に上陸し、博多の兵站到泊してもらった後、帰省を許されたのでC氏は萩へ帰り、叔父（母の弟）のところへ挨拶に行き、今生の別れだからと短刀（殿中差し）をもらった——飛行機に乗るのに長いのは要らない、自刃用にとのことであった。5月28日に博多まで戻り、翌朝、戦隊長に挨拶に行った。南薩鉄道という軽便鉄道で加世田まで、支線に乗り換えて万世飛行場へ行き、三角兵舎に宿泊した。中隊ごとに分けられ、「いつでも出られるように練習しておけ」と言われたので、天気の良い日は枕崎や甕島などに飛んだ。

しかし結局、C氏たちに出撃命令は出なかった——「戦後になってから考えますとね、俺たちは雨に助けられたな、と。ちょうど6月で梅雨時だったでしょ。とても飛行機が出ていけないような天候が続いたんです」。万世飛行場は急場ごしらえで舗装されていなかったの、滑走路周辺も雨でぬかるんだ。ぬかるみで飛行機が動けなくなると、年配の地元民の挺身隊が押しに来てくれるのだが、「兵隊さん、いくつ？」と聞かれてC氏が「[数えて] 18です」と答えると、「18で来るんだ！」と驚かれたようだ。整備兵にも「えらい子どもが来たのお」と言われていた——「私は背が小さかったので、操縦席に座っていると外から見えず、『おい、無人機が来たぞ』なんてからかわれていましたよ（笑）」。

「私も一度、[各務原から平壤に帰る際、鈴鹿山脈越えで下降気流に巻き込まれて] 死にかけていますから、死ぬってこういうことだったのを体験していますから、出撃に恐れはなかったですね。でも結局、出撃を免れました」。6月23日に沖縄戦終了の電報が入り、7月になると万世飛行場に飛行機は5機しか残っていなかった。九九式襲撃機の補充もなく、C氏ら飛行第66戦隊は太刀洗まで戻って、人員と機材の補充をすることになった。太刀洗北飛行場では九九式のほか隼戦闘機でも2~3日に1回、演習をした。太刀洗には兵舎がなかったため、近隣の農家に分宿させてもらっていた。8月14日の午前0時か1時ごろ、不寝番がC氏ひとりを起こしに来て、「落下傘袋だけもって[戦隊を離れた独立飛行中隊の] 三中隊に行け」と言われ、出撃命令が出たのだとC氏は思った。米軍が本土決戦に来るものと考え、飛行第66戦隊は徳之島を取られた5月下旬以降は1機も戻ってきていなかったの、「この初陣が最後の戦いだ」と覚悟した。しかしながらC氏の出撃はないまま、戦争は終わったのである。

2) 山岡莊八「いのちの大樹」に対するC氏の反応

実は、聞き取り調査に先立ってC氏には、下記のような山岡莊八の1967年の論考「いのちの大樹——日本人の死生観」を見せていた。これには、本稿冒頭の「ハミルトン・ルール」ないし包括適応説に対する、市井・大衆レベルでの直観的洞察が含まれているように感じられ、C氏がどのような反応・感想を示すか興味があったからである。

「私自身が枯死しても、私の生命が死滅したことにはならない。少しさかのぼって祖父母を基点としてみると、両親、叔伯父母、兄弟と続いて、さらに子や孫の中に生き継いでいる。この考えに立つと、特攻隊員の体当たりは決して自殺ではない。みずからを殺して他の枝葉を茂らせようとするもので、実はより広い生命の尊重に通じてゆく」⁴⁾

しかし、終戦までを語り終えた後に、この一節をおそらく想起しながらC氏が述べたことは、山岡への同意というよりはむしろ冷やかな見解であった——「死生観のどうのというのは後の人が言うことで、当事者は生死ということは頭から吹っ飛んでいました。誰もがそんなに渋い顔はしていなかったはず。自分でわかりますが、飛行機で出ていく時は、笑顔で出て行けます。本当に緊張感が出るのは敵陣に入ってからでしょうね」。

3) 戦後のC氏とその家族

C氏は1945年8月18日に復員して、上陸用舟艇で山口県仙崎港に上がり、萩の叔父の家に世

話になりながら農家の手伝いをした。

C氏とその実兄の出征後も、北京にとどまっていた母と上の姉家族と下の姉1人の弟（終戦時にまだ6歳）のうち、上の姉は結婚後も劇場のチケットの「もぎり」等の仕事をしていた——娘が生まれていた。C氏の中学退学と同じ時期に女学校を退学していた下の姉は、三井物産の電話交換手をしていた。終戦直後の北京では、国民党の蒋介石が在留日本人に手を出すと厳命していたので、満州のような恐ろしい略奪と逃避行などは全くなく、1945年の暮れまで従来通り暮らすことができた。そして46年正月に北京を離れて塔沽に一時収容され、そこから46年夏に、C氏の母、兄嫁——実兄はいったん復員した時に、いとのこと結婚していた——、上の姉の家族3人、下の姉、弟の7人で萩の家に戻ってきた。上の姉は2番目の子を宿していたので、途中で生まれては困るからと引き揚げ船に早く乗せてもらえたそうだ。C氏が萩の玉江駅に迎えにいくと、みんな「煤けたかっこう」で現れ、母には「おまえ生きてたの!」と言われた。というのも、終戦後に北京の家に、C氏から住所を聞かされていた戦友たちが2度立ち寄り、「C君はもうすぐだろう」などと言いつつ遺影用に撮った写真を置いて行ったりしていたので、母はC氏は特攻で死んだものとばかり思っていたのである。

実兄は復員してきた後、しばらくは生活が不安定であったが、47年から進駐軍の物資調達を行なう特別調達局（現・防衛省内組織）の山口支所に就職した。やがて広島県呉市にあった本庁に転勤となり、そのまま呉で暮らして2子をもうけた。

上の姉の家族であるが、義兄は福岡県朝倉市の出でもともと大工であり、戦後復興の需要が高まる中で再び大工を始めた。C氏も、義兄から手伝ってこないかと声をかけられたので、母と就学中の弟を連れて朝倉市に移り、義兄の仕事を手伝い始めた。

下の姉は、先の萩の叔父の紹介で漁師と結婚して、ずっと萩市にとどまった。

北京から帰国してから小学校に入り、C氏・母とともに福岡県に移住した弟は、大卒後、島津製作所に入社し、最後は長崎出張所所長になり、長崎に定住した。

さてC氏本人であるが、上のように義兄を手伝って建具・家具などの木工業に従事するも、1955年前後に義兄の会社が倒産したため、博多の製図用具を作る会社で職人として再出発した。65年、その製図用具の販売会社の東京支店長となり、住まいを首都圏（千葉県市川市）に移し、その後ずっと関東を拠点に仕事をした。この販売会社の事業が思わしくなかったため、2年後の67年に上記の博多の会社の社長親戚に事業を譲渡し、「また職人に戻ろう」と、四ッ谷の会社で家の床の「寄木張り」の仕事を10年くらい行なった——C氏の自宅玄関には、「最後の技術を残しておこう」との意図で見事な「網代張り」が施されているのを見せていただいた。その後、床面のプリント化の波が押し寄せて仕事が減ったため、C氏は今度は壁や床のシート張りなどの内装業に転換し、70歳までその仕事に従事した。C氏いわく、「うちは[義理の]祖父の代から木に関連した仕事をしていて、私自身も大工の下地があるので、ずっと職人で通してきました。木材で我が家はつながっているのです」。

C氏の作った家族であるが、1953年に上記の朝倉市で結婚した。2人の男子をもうけ、長男は成田の高等職業専門学校を出た後、石川島播磨重工業（現 IHI）に就職した。次男は父C氏と同じ内装業に就職した。この聞き取り調査が行なわれた年（2016年）、C氏の米寿と次男の還暦

が重なって祝ったそうである。長男・次男のともに2人の子をもうけ、現在は、次男の方にC氏の曾孫が1人いる。

IV. 考察

特攻戦死したA氏と生存者C氏は、生まれた年が2つ違うだけであり、家業がもともとは林業と木工業であること、また、生まれたきょうだいが本人含めて9人であること（幼少期を過ぎるまで生き延びた数は異なるが）と、父がともに、子どもの多くがまだ成人せぬうちに仕事上の事故で亡くなっている点が、よく似ている。その意味では、全くの偶然であるが、特攻とその帰結がもたらした家族への影響を比較して推し量るには、まずまず良好なケースであると言えよう。

結論から言えば、本研究が当初想定していた、戦争での自爆攻撃を貫く「ハミルトン・ルール」、という仮説はどうやら妥当ではないようである。家族史についての聞き取り調査の結果として、特攻戦死したA氏の遺族（この場合、主にきょうだい）の方が、生還したC氏の家族よりも同時代における適応度・繁殖成功度が高まったとは、到底言えないであろう——C氏の家族史を示す図2は、C氏以外のきょうだいの子・孫のデータが乏しく、図1と比較しにくいのであるが）。むしろ結果が示すのは逆のことかもしれない。戦前・戦中にともに働き手としての父を失っていた両家族は、それに代わるものとともにA氏・C氏を必要としていたのであるが、A氏が戦死することによってその家族は今日言うところの母子家庭となり、A氏より年下の未成年だったきょうだいたちは中卒や定時制高校など——戦後初期の水準としても——十分な教育を受けることなく世に出なければならなかった。それに対して、C氏が特攻死せずに無事に復員してきたその家族は、C氏以外に義兄を働き手・雇い手として頼りにできた上に就学期のきょうだいが1人（弟）のみだったということもあるが、十分な労働力を得て再出発をすることができた。つまり、これは、一家の働き手が戦死せずに戻ってきた家族の方が戦後に再建・繁栄がしやすいという、ごく常識的な予想を支持しており、帰属集団（お国）のための自己犠牲的な特攻死がもたらす「名誉」によって遺族が、（縁談や周りの援助などにより）戦死しなかった場合よりも栄達を遂げるといって、本研究が当初想定したシナリオは裏切られたと言ってよいだろう。

もちろん、聞き取り調査した対象事例の少なさや特殊性はあるにちがいない。特に戦前から、C氏の家族は故郷の山口県を離れて中国大陸にわたり、満州から北京へと移動しながら、中国の激動の時代を、しかし比較的安定した生活水準の下に生きたのである⁵⁾。特に北京でのC氏の家族の暮らしは終戦に至るまで食料も豊富で、一般国民が飢えていた内地とは対照的であり、終戦後の比較的平穏な帰国過程にしてもかなり例外的であり、その物心両面で当時の他の日本国民よりは恵まれた生活状態が、戦後にも持ち越された面はあるであろう。その意味では、今後より多くのケースを聞き取り調査することによって「平準化」された時には、もしかしたら、「ハミルトン・ルール」の通用性を論ずることができるかもしれない。それに関しては、現時点では何とも言えない。

また、自爆攻撃という自己犠牲的な利他行動の結果が、帰属集団である国家の敗北（敗戦）と

いう、ネガティブなものに終わったことも、関連しているかもしれない。そして、戦後は国民的レベルでの価値観の抜本的転換がなされ（いわゆる民主化）、自爆攻撃は献身的ではあっても、かつての国家の誤った選択によって強いられたものとして、それ自体がネガティブに捉えられるようになったとすれば——例えば、「犬死に」論の流布に見られるように——、それが実行者の遺族の適応度・繁殖成功度を高める方向に働かなかったということは、あり得るであろう。逆に、英米のような戦勝国であれば——自爆攻撃は行わなかったにしても——戦争中の自己犠牲的行動が戦後も英雄的なものとして称揚され、さらには遺族の適応度を高める方向に働き得るかもしれない。

V. 代替的な仮説——一撃で戦局を変えられるという自信

上記のように、本研究が想定していた仮説（「ハミルトン・ルール」ないし包括適応説）は立証されなかったわけだが、調査したケースの少なさ・特殊性や、敗戦後の諸事情などを勘案すると、今のところ完全に棄却されたとまでは言えない。だが、ここでは参考までに、「ハミルトン・ルール」とは異なる代替的な仮説を、進化生物学的な先行研究の一部から見ておくことにする。

オーベルと森川は、日本の特攻兵たちが残した膨大な手紙・遺書の内容分析から、彼らを動機づけていたのは、自分の命を投げ出してまで家族・血縁者を救いたい、またうまくすれば彼らの適応度・繁殖成功度を高めたいという、ハミルトンが考えたような包括適応ないし血縁淘汰の論理ではない——また、よく説明図式として持ち出される神道イデオロギーの作用でもない——、と断ずる——「家族への心配も宗教的動機づけも、神風パイロットに自爆司令を遂行するよう説得する上で特異な役割を果たすことはなかった」（Orbell and Morikawa 2011 : 311）。「彼ら〔神風パイロット〕は家族や、文化的に望ましいとされた孝（filial piety）への大いなる愛を示したけれども、家族を救うことは日本という国を救うことよりも、動機づけとしてははるかに小さかったようである」（Orbell and Morikawa 2011 : 315）⁶⁾。

オーベルと森川によれば、彼ら特攻兵たちはもっと直接に、自らの一撃によって日本という苦難のうちにある国を救うことを考えていた——「ハミルトンの論理ならば、比較的近い血縁者のために進んで命を投げ出すような淘汰を支持し得るだろうが、しかし血縁者の命を救うことへの関心は神風パイロットを特異に動機づけてはおらず、日本の切迫した戦況を和らげることが強力な動機づけだったようなのだ」（Orbell and Morikawa 2011 : 315-6）。自爆により苦しい戦局を好転し得るといふ、確信にまでは至らないが見通しのようなものが特攻兵たちに広範に共有されていた、というのである——「自らの死が戦争における祖国の運命に重要な貢献をし得るといふ信念、それゆえまた名誉と美が自らの死と結びついているという信念が、神風パイロットの間では強かったようだ、我々は結論づける」（Orbell and Morikawa 2011 : 313）。オーベルと森川は、次のようにまで言い切っている——「本土侵攻がますます迫っているように思われるにつれて、戦争努力に違いをなさしめんとする彼ら〔神風パイロット〕の関心は、名誉ある死ないし美しき死を遂げんとする関心を〔むしろ〕押しつけたのである」（Orbell and Morikawa 2011 : 314）。

神風パイロットに限らず、自爆攻撃の可能性を増す信念として、「外国人嫌い (xenophobia)」 「仲間への友愛感情」 「戦争での [戦況を変えられるという] 自信過剰」 の3つが重要であるという (Orbell and Morikawa 2011 : 319)。このうちの特に3番めの、戦争における自信 (過剰) の要素は、飛行術に習熟した特攻兵たちの間には確かにあったように思われ、C氏の述懐の中にも幾分か感じられたのであるが、ここでは傍証として、万世飛行場から出撃したもう1人の特攻戦死者に関する遺族 (実父) の記述を挙げてみたい——遺族の方のご厚意で非売品のコピーを提供いただいたものである。ここでは、この戦死者をD氏とする。

D氏は学校在学時より理数系と体育に秀で、徴兵されると「戦争が苛烈になれば、飛行機によって敵の戦力を破壊するより他に戦争に勝つ見込みはない」との確信のもと飛行兵を志願し、さらに「命がけの飛行訓練を積み、自信満々。戦局われに利あらず、今こそ、神州男子の決意すべき時が来た、と考へ特攻隊に志願したのであります」。D氏が家族に宛てた最後の手紙には、「明後日の出撃、必ず一艦撃沈させて参ります」とあり、父は「此の辞句に最大の迫力を感じます。『必ず』の一語……何んという自信に満ちた言葉でしょう」と記している。

オーベルと森川の説は、現代的な群淘汰説——かつての群淘汰説のように「種の保存」を想定しない、集団内で特定の形質が共有される度合の差異によって、集団を単位とした淘汰が起きるという説——に立脚したものであり、そのことについては批判もあり得るだろう。また、特攻兵たちが実際に書き記している、あくまでも主観的・意識的な「動機づけ」が、遺伝子レベル・表現型レベルで作用する淘汰の証拠たり得るのかという反論も、包括適応説サイドからは当然出てこよう。しかし、本研究で依拠していた仮説 (「ハミルトン・ルール」) に対する1つの代替的仮説として、検討の余地は十分あるように思われるのである。

VI. おわりに

本稿冒頭にあるように、ピケティは、資本主義における資産格差拡大の傾向を法則的に捉えた上で——有名になった「 $r > g$ 」の定式はそれを端的に表している——、それを一時的に止め、場合によっては逆転 (格差縮小) をもさせる効果を持ったものとして、2度の世界大戦を挙げた。これらの大きな戦争、とりわけ日本が大々的に行なった2番めのそれが、そのような社会階層秩序の弛緩さらには転覆の効果を持ち、そのことが広く国民大衆の間に直観的に認識されていたとするなら、それはまたとない血縁淘汰環境 (間接的な繁殖競争の場) となったであろう、というのが本研究の仮説であった。その仮説を検証するための素材として本研究は、究極の自己犠牲的利他行動と言える特攻による自爆攻撃と、それが遺族の戦後の生活に及ぼしたインパクトを選んだ。

しかし本研究は、その仮説を立証するには至らなかったし、むしろ逆のこと、特攻死による若い働き手の喪失が家族の戦後再生の大きな足枷になってしまうという、言ってみればごく常識的な事態が浮かび上がったのである。今後もこのテーマでの実証研究を続けてゆくとすれば、上記のような代替的仮説も視野に入れつつ、より多くのケースのデータを集めてゆかねばならないと考えている。

注

- 1) 進化生物学ないし社会生物学において一般に「適応(度)」(fitness)とは、生物個体が環境に合った種々の表現型を備えることで生存が可能になっている状態、またその度合いのことである。それに対して「繁殖成功(度)」(reproductive success)は、特に繁殖、つまり個体が子孫の数を増やすことに関する適応、またはその度合いを指している(自らの環境適応度が低いために成熟後の生存率が低くても、繁殖成功度が高いことによって子孫を維持しているような生物種もある)。今日の我々ヒトの繁殖成功度は、単純に子孫の数という「量」によってのみ測られるものではなく、職業や学歴などを通じた社会階層上の地位の維持ないし上昇といった「質」の面も重要である。
- 2) パレスチナ人の自爆テロに関しては、ブラックウェルとスギヤマ(未公刊)が、その繁殖戦略上の価値を実態調査により明らかにしている——「ヨルダン川西岸とガザ地区の男性の多くは、配偶者を見つめるのに苦労する。親に婚資を支払う金銭的余裕がない、平行いところ婚が優先される、多くの女性が一夫多妻婚をしたりイスラエル側に住む裕福なアラブ人と結婚したりして花嫁候補者が少ない、などがその理由である。ブラックウェルらは、パレスチナ人自爆テロリストの99%が男性で、86%が未婚、81%は少なくとも6人のきょうだいをもち、パレスチナ人の平均より家族が多い点に注目する。これらをほかの数字とともに単純な人口モデルにあてはめると、自爆テロリストがテロを実行した場合、その金銭的見返りで兄弟たちに花嫁を迎えることができ、払った犠牲が生殖の点では価値ある行為となることがわかった」(Pinker 2012=2015: ①618)
- 3) 旧日本陸軍最後の特攻基地であった万世飛行場は、小泉純一郎元首相の実父で万世出身の小泉純也衆議院議員が、万世町長だった吉峯喜八郎とともに誘致活動をし、1943年7月に着工、戦局も悪化した44年末に完成し、沖縄戦が始まった45年3月から7月までの4ヶ月間のみ使われた。戦後、飛行場はなくなったが、72年に生存者・苗村七郎氏(故人)の呼びかけで跡地に慰霊碑「よろずよに」が建てられ、93年には万世特攻平和祈念館が開館した。
- 4) 「いのちの大樹」は初め、予科練之碑保存顕彰会の機関誌『予科練第2号』に掲載されたもので、ここでは甲飛十期会(1972: 50)に転載されたのを引用した。
- 5) 中国大陸での少年時代の体験はC氏の内面にも影響を与えたであろうと、C氏自身が語ってくれた。町なかで「匪賊」「馬賊」が争いを繰り広げ、敵や警察によって斬られた彼らの首が晒されているような、死と隣り合わせの環境の中で過ごしたことによって、おそらく内地出身の特攻兵ほどには、自爆攻撃をさほど怖いと思ったり悲観したりしたことはなかった、というのである。
- 6) 逆に、特攻兵たちが国や天皇よりも家族のことを考えていた証拠としてよく引用されるのが、最初の特攻戦死者の1人である関行男大尉(1944年10月25日戦死)が残した、次のような言葉である——「ぼくは天皇陛下のためとか、日本帝国のためとかで行くんじゃない。最愛のKA[海軍用語で奥さん]のために行くんだ。…日本が敗けたら、KAがアメ公に強姦されるかもしれない。ぼくは彼女を護るために死ぬんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだすばらしいだろう!」(森本1998: 159)

参考文献

- Hamilton, William D. (1964) "The Genetic Evolution of Social Behaviour, II", *Journal of Theoretical Biology*, 7, pp.17-52.
- 甲飛十期会 (1972) 『散る桜 残る桜——甲飛十期の記録』 甲飛十期会
- Millot, Bernard. (1970=1972) *L'épopée Kamikaze*, R. Laffont. 内藤一郎訳『神風』 早川書房
- 森本忠夫 (1998) 『特攻 外道の統率と人間の条件』 光人社
- Orbell, John and Tomonori Morikawa. (2011) "An Evolutionary Account of Suicide Attacks: The Kamikaze Case," *Political Psychology*, 32: 2, pp.297-322.

- Piketty, Tomas. (2013=2014) *Le capital au XXIe siècle, Seuil*. 山形浩生・守岡桜・森本正史訳『21世紀の資本』みすず書房
- Pinker, Steven. (2012=2015) *The Better Angels of Our World: Why Violence Has Declined*, Penguin. 幾島幸子・塩原通緒訳『暴力の人類史』㊦青土社

※本研究は、平成28年度奈良大学研究助成を受けた。

Summary

Thomas Piketty's *Capital in the 21st Century* contains the slightly vicious statement that only two World Wars could preclude and even invert the inegalitarian and divergent tendency of the capitalist economy. Influenced by his vision and so-called "Hamilton's Rule" (the inclusive fitness theory) in evolutionary biology, I constructed the hypothesis that wars are a well-tuned place where nepotistic and reproductive strategies are selected in order to raise one's family's status through gaining nationalistic honors or prestige by way of various altruistic behaviors in an age of upheaval in a stratified society. I examined the hypothesis through interviews with a bereaved family and a survivor of the "Kamikaze" suicide attack, one of the supreme altruistic and self-sacrificing behaviors of the Second World War. Contrary to my hypothesis, this bereaved family of the Kamikaze pilot greatly suffered from loss of an important breadwinner in the postwar restoration era, only to be late to recover the quality of family life and to fail to endow his young siblings with adequate education. Compared to their situation, the economic situation of the survivor's family was stable and enabled them to rebuild the family life earlier in the same era, which perhaps means that "Hamilton's Rule" is not applicable to these cases and that the common-sense view about family lives after the war may be true.

【Key words】 war, evolutionary biology, reproductive success, inclusive fitness, Kamikaze